



審査員
特別賞

障がい者の生き甲斐・やり甲斐を生む社会づくり

● 渡部哲也 (わたなべてつや) さん
仙台の自然派ビュッフェレストラン六丁目農園で多数の障がい者を雇用中。苦手な作業を減らし得意分野を生かせる職場を作り、親からは「これで死ぬ」との感謝も。同時に耕作放棄農地の活用や人手不足解消も目指す。



会社から社会へ貢献する生き方への挑戦

● 水野順之 (みずの よしゆき) さん
「さえない会社員生活」を打破したいと考えたアイデアは全てボツ。しかし、社会起業大学の仲間とホームレス支援、福島震災復興支援などに関わる中で、社内起業的なプロボノやスタディツアーなどの企画を決意した。



共感
大賞

21世紀の産婆が日本を変える

● 濱脇文字 (はまわき ふみこ) さん
女性が出産することへの不安解消や産前産後のサポートをするために、(一社)産前産後ケア推進協会を設立した。妊娠、出産、子育てまで切れ目のない支援と、100年後を創造する地域と人の育成をめざす。2人の女性審査員も「ぜひ手伝いたい」と評価。

政治起業家部門



グランプリ

NHK『クローズアップ現代』のキャスターとして日本の報道番組の在り方に深い変革をもたらした

● ジャーナリスト 国谷裕子 (くにや ひろこ) さん
昨年まで23年間務めた同番組の生放送インタビューにおいて、権力者相手でもおもねらず、安易に持論を述べず、的確な質問で問題の本質となる重要なメッセージを引き出す姿勢が、報道番組に変革をもたらしたと評価。



外出困難な方々へ質の高い訪問理美容をお届けし、制限のないその方らしい生活が出来るお手伝いをしたい

● 訪問理美容美容まる 高木のどかさん
認知症の祖母の髪を切ってあげたら笑顔でほめてくれた。対人恐怖の人が訪問するうちに改善してきた。美容には力がある。均一流れ作業ではない高価値のサービスを提供する。



グランプリ

エンタメの子カラで毎日をちょっとだけよくしたい

● 田村勇気 (たむら ゆうき) さん
お金をかけずに人が集まり社会を元気にする企画として、心温まるストリートアートを提案。会社に籍を置きながらNPO活動として展開し、社会、自分、会社ともWinWinに。わくわくし、成功の予感がすると高評価。

2月19日に開催された「ソーシャルビジネスグランプリ2017」の冒頭では、政治起業家グランプリ受賞の国谷裕子氏と藤沢久美氏(ソフィアバンク代表)の対談が行われた。昨年3月まで、NHK『クローズアップ現代』のキャスターを23年務めた国谷氏。日本屈指のキャスターと言えるが、初めて担当したBSの番組は不評で、1年で降板という挫折から始まっていた。意外にも「帰国子女の自分が知らないことがあるのでは？」というコンプレックスが、スタッフとの深い議論や生放送インタビューでの的確な切込みにつながったのだという。

政治問題を扱う際の公平・公正の概念が変わってきたのは事実で、予想外の降板にはなったが、「地位が高い人こそネガティブな方向から訊く。それにより事実を浮かび上がらせる」姿勢を貫いた。今は「持続可能な開発の在り方」に視点を置いているという。

社会起業家部門では、障害者雇用の渡部哲也さんが審査員特別賞、妊娠・出産・子育てサポートの濱脇文字さんが共感大賞を受賞。それら始動済みの活動を押しえてグランプリを獲得したのは、ストリートアートで街を元気にする田村勇気さんのプランだった。



前回グランプリ受賞者の塩崎良子さんが活動報告。株式会社TOKIMEKI JAPANを設立し、がん患者のケア用品やギフトなどを開発し、売り子付きワゴンショップ派遣などユニークな展開をしている。



登壇者も審査員もプレゼンターも皆で。



社会起業大学の田中勇一理事長は、「私も起業して木っ端みじんの体験をした。でもやってみなくてはわからないことは多い。今日が、一歩を踏み出し、困難を乗り越える勇気になれば」と締めた。



財団理事長代理・佐藤梨奈から起業助成金の目録を授与。田村さんは大手広告代理店勤務。ダメキャラが頑張って飛躍するストーリーが大好きという。